

教師教育における ネットワーキングの試み ～私的体験の省察を通して～

静岡大学大学院教育学領域教授 **田宮 縁**

静岡大学卒業後、一般企業に就職。静岡大学大学院へ進学し、修士(教育学)。静岡大学教育学部附属幼稚園教諭、常葉学園大学講師、同准教授、静岡大学准教授を経て、現職。環境との相互作用の中で総合的に学ぶことを研究の領域としている。2013年、所属大学のASPUivNet加盟を機に、ユネスコスクール支援を開始。富士市総合計画策定委員など各種委員を歴任。



1. 背景と目的

(1) SDGs達成の担い手育成(ESD)事業

筆者が所属する静岡大学では、2019年度から文部科学省ユネスコ活動費補助金を受け、SDGs達成の担い手育成(ESD)事業「ESDを基軸とした質の高い幼児教育の推進と学校種間の接続」をテーマに、3年間、教師教育に関する研究を進めてきた。

主な活動は、「全国幼児教育ESDフォーラム」の開催と「SDGsデジタル絵本」の制作である。本事業では「ともに創る学びの場」を基本コンセプトとし、事業主体だけでなく、参加者自らが場を創り上げていくプロセスを通して学ぶ方法、いわゆる、PBLを用いた。

【全国幼児教育ESDフォーラムのあゆみ】



幼児教育分野では初の全国フォーラムとなる2019年度は、全国より幼児教育から高等教育までの実践者・研究者、社会教育関係者などが集い、2日間に渡り、講演会、実践交流、トークセッションなどが行われた。2年目は、新興感染症への対応のため、質は保ちながら、対面での時間を軽減する方策として、デジタルプラットフォーム「ネットワークラボ」を開設し、事前にWeb上でバーチャルフォーラム(基調講演、実践報告のオンデマンド配信)を開催。当日は5分科会をハイブリッドで平行に実施するというユニークな開催方法を提案し、交流と発信の場を創出した。

最終年度もハイブリッドの開催ではあったが、会場・オンラ

インだけでなく、ポスター展示の場を設け、対面での参加者の交流も見られた。フォーラムの中では、各地で動き始めた新しいスタイルの教員研修会の実践が発表された。

例えば、静岡県教育委員会幼児教育推進室では、静岡大学教育学部との連携で、『保育プロセスの質リフレクションシート』を作成、市町で活用支援事業を実施している。徐々に市町の人的環境等に応じたプログラムの相談や幼小中といった学校種間の学びの場として活用したいなど、想定以上の活用方法が寄せられ、その都度、幼児教育推進室と大学で協議し、活用研修のプログラムを再構築、提供している。また、富士市保育幼稚園課では、静岡大学への委託事業として「富士市教育・保育施設訪問支援事業」を展開している。大学教員が訪問し、保育参観後、園の課題に対して「オーダーメイド」な支援を行う仕組みである。

実践者である海老名恭子氏(静岡市立東豊田こども園園長、当時)からは、静岡大学教育学部が主催、静岡市立こども園が協力という役割分担で行われてきた「ユネスコスクールの遊びと生活展」について、その意義に気づいた各園の保育教諭の有志が、年に2回、ESDに関する研修会を開催するようになったと報告された。また、当日のポスターの展示には、「2021年保育者の主体的な学びがスタート」というタイトルが掲げられ、保育者自身が受動的な学びから主体的な学びに変化したことが述べられていた。さらに3回のフォーラムを受け、静岡市こども園課では、保育者の主体的な学びに注目し、サポートする体制を構築し始めた。

上記の例示のように、実践者の学びへの欲求を行政が受容し、場を創出し、大学が支援するという関係性が構築された。そして「全国幼児教育ESDフォーラム2021」では、教師エージェンシーが発揮できる教員の学びの場には、「楽しさ」「仲間」「活動」そして「場(プラットフォーム)」が不可欠であり、PBLという方法が有効であることが示された。

(2) 本論の目的

本事業に関わる多くの関係者が「いつの間にか巻き込まれた」と語っている。その背景には何があるのか。前項の例で示され

た実践者・行政担当者・大学教員の学びの内容は、それぞれの立場で違いはあるにしても「巻き込まれ」、エージェンシーを発揮していくプロセスに大きな差異はないと思われる。

本論では、16年前にESDに出会った筆者が、実践者として教師教育に巻き込まれていくプロセスを対象に省察するところから始めたい。筆者のESDに関する初期の実践を対象に、エンゲストロームの活動理論を背景として考察していくことを目的とする。

2. 実践の省察

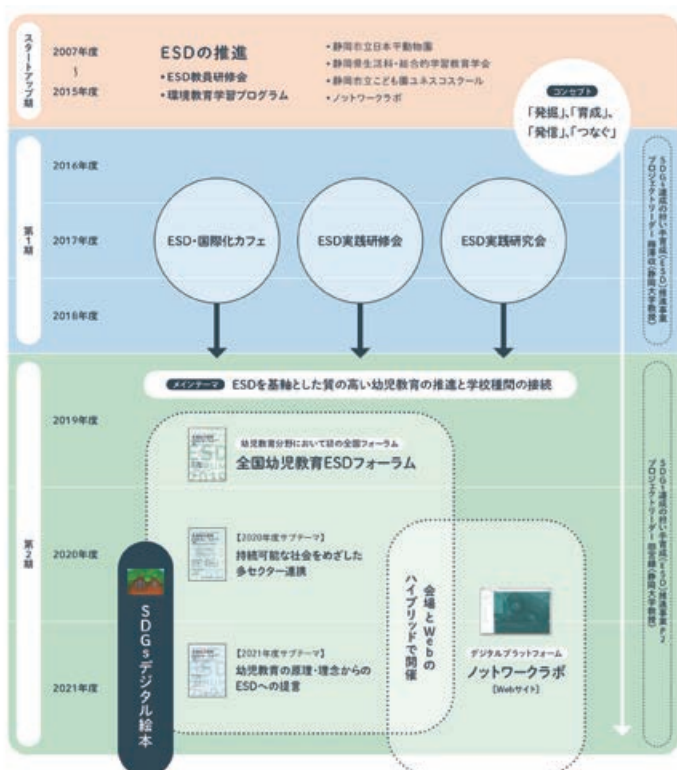
筆者の教師教育の実践は、下記の図のとおり3期に分けられ、本論での省察の対象となる実践は、スタートアップ期と第2期とする。

(1) 「直感」～静岡市立日本平動物園を舞台に

筆者とESDとの出会いは、2007年である。当時、勤務していた大学で「エネルギー環境教育」の視点での研究会が立ち上がり、その活動の一環で、ESDをベースに幼児教育分野からの教員研修会「食べてつながる命の輪 in Zoo」の実施とミミズコンポストシステムなど園内で取り組めるプログラムを立案、及び検証から着手した(角替ほか,2010)。

【「ESDを基軸とした質の高い幼児教育の推進と学校種間の接続」コンテキスト】

本事業は、多セクター連携によるSDGs達成の中核的な担い手となる教師教育の推進を目的としており、先生方が主体となり学ぶ場を創造し、先生同士や多セクターをつなぐ教材やプロジェクトを開発・提供してきました。



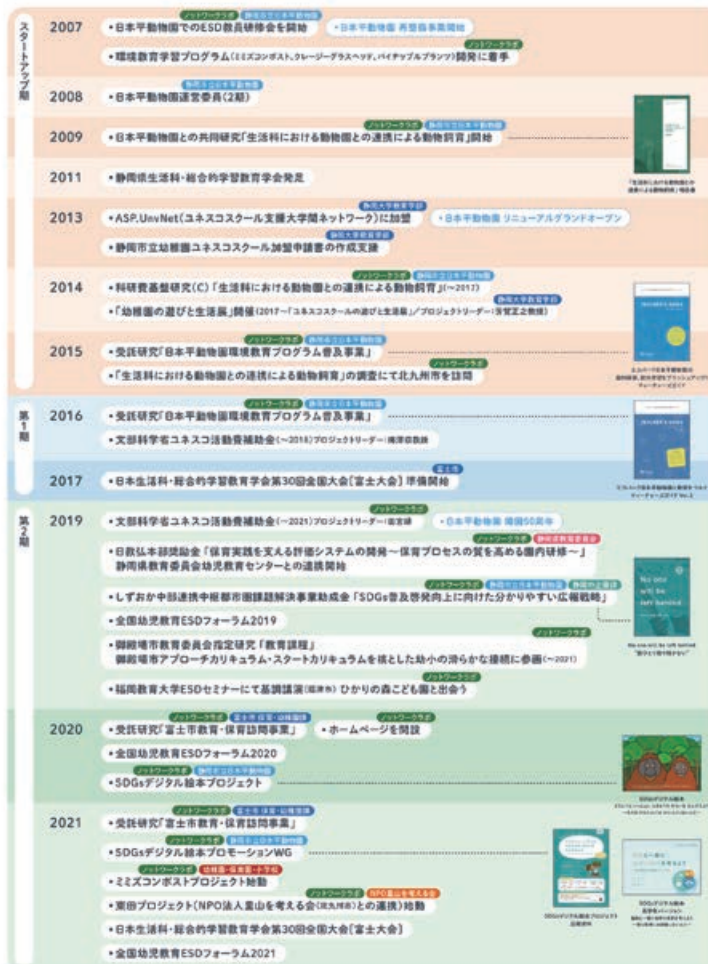
令和3年度 文部科学省ユネスコ活動費補助金
SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業(2)教師教育の推進

食物連鎖や命のつながりをテーマに、楽しみながら学べ、かつ、教員研修のプログラムが立案しやすい施設として動物園に注目し、まったく伝手もない静岡市立日本平動物園の扉を叩くところからスタートした。一方、動物園もリニューアル開始直前で、環境教育という視点からのソフト事業を模索している時期でもあったようで、双方の必要感が原動力となり、現在に至っている。

(2) 動機づけは「対象」の中に

初回の教員研修会は、動物園で飼育を統括されていた海野隆至氏を講師に、静岡市立幼稚園(当時)園長、主任を中心に参加者を募り、動物園内の会議室で行った。初回の内容は、出張動物園ガイドで行われている「草食獣と肉食獣」をテーマに、体のつくりの比較や体の機能の秘密について、頭骨標本などに触れながらの講義とリニューアル後の動物園についての講話、2回目は、別の受講者を対象に海野氏に園内を見学しながら解説を加えていただいた。動物を目の前に疑問に思ったことをそれぞれが質問し、内容が深まり、動物園、受講者の双方にとって満足度の高い有意義な研修会となった。一方、ESDという視点では、教員研修会のフィールドとして動物園を十分に生かされていないという感覚は拭いきれなかった。

【ネットワークラボの歩み】



この感覚は、筆者自身の動物園の知識が限定的だったこと、動物園との検討が不十分だったことに起因している。一方、知識や分業の制限が、課題意識を生み出し、さらなる活動の動機となった。動機づけは、「主体」ではなく、「対象」からもたらされるものなのかもしれない。

(3) 「空間」から「場所」へ

このような中、海野氏より日本平動物園運営委員就任への打診があった。運営委員会とは、地元住民代表、学校園代表、学識経験者、メディア、一般公募の市民などで構成され、動物園の運営全般に関する協議を行う場である。特に、リニューアルが開始される時期と重なり、駐車場の進入路の検討からプランディングに関することも審議された。また、展示動物が移動する前の新しい施設を見学させていただき、見せ方やバックヤードなど工夫についての説明も受け、一般の人が触れることのない動物園の裏側を知ることができた。また、Webサイトリニューアルのプロポーザル委員として審査に参画したり、園内ガイドやパンフレット作成に関しての意見を求められたりするなど、クリエイティブな部分での場に立ち合わせてもらう機会をいただくことで、日本平動物園への愛着は増していった。心地よく「巻き込まれていく」自分がそこにいたように思う。

それは、ちょうど、誰でも知っている言葉である「空間」と「場所」を比較したトゥアンの言説に近い感じだった。トゥアン(1993)は、場所(=安全性)に対しては愛着をもち、空間(=自由性)には憧れを抱いていると述べている。巻き込まれる前提には、自由度の高さが存在するのではないだろうか。トゥアン(1993)の言葉を借りるのならば、「自由とは、行動する力と、行動するための十分な空間的余地をもっているということの意味している」(p.196)ということである。この前提を基に、行動の有無は主体に委ねられており、その文脈に身を置き、夢中になって活動をする中で、「空間」が「場所」に変化していく。

動物園が筆者にとって「場所」となった時、なぜ動物園を教員研修会の対象にしたのかという輪郭がみえてきた。

(4) 「媒介物」の存在～コンテンツ制作

筆者は、受託研究「日本平動物園環境教育プログラム普及事業」に、2015年度、2016年度に取り組むこととなる。その成果として、ESDをベースとした2冊のティーチャーズガイドが刊行された。その冒頭では、動物園の存在の意味を以下のように示している。

- ①子どもたちにとって身近な施設であると同時に、大人にとっては生物多様性の保全や種の保存など地球環境規模での環境問題についての気づきを促す施設
 - ②本や映像で体験することのできない、動物たちのにおいや鳴き声を直接体験できる施設
 - ③いのちといのちの「つながり」(食物連鎖と生命の継承)を実感することのできる施設
- 動物園は、ローカルな施設でありながら、グローバルな視

点を与えてくれる施設であり、世代を超えて感性を刺激するフィールド、総合的に現代的な課題とその課題同士のつながりを学ぶESDにふさわしいということを伝えている。

これらのガイドブックは、「エコパーク日本平動物園の園外保育、校外学習をブラッシュアップ!」(2015年度版)、「エコパーク日本平動物園と教室をつなぐ」(2016年度版)をテーマとしており、ワークシートの原稿や解説も含んだ、教員を対象とした、いわゆる、ファクトブックとしての性格も帯びたものである。このガイドブックは、教員研修会や講演会などを通して、筆者と教員をつなぐ機会をもたらした。

(5) ESDを推進する「コミュニティ」

動物園と筆者との関係性は、海野氏の後任の柿島安博氏を中心に取り組まれた共同研究「生活科における動物園との連携による動物飼育」により、強固なものとなる。また、ほぼ同時期に、2021年に静岡県内で開催された日本生活科・総合的学習教育学会に向けて、静岡県生活科・総合的学習教育学会が設立した。さらに、2013年には、静岡大学教育学部がASPUnivNetに加盟、そして、静岡市立幼稚園ユネスコスクール加盟申請書の作成支援が開始された。翌年には、ユネスコスクール支援の一つとして、「幼稚園の遊びと生活展」が静岡大学の教授 芳賀正之氏を中心に開催される。のちの「ユネスコスクールの遊びと生活展」の発端となるイベントである。

以上のように、ESDという明確な目標の下、内発的な動機づけに基づいた人が集まる、いわゆるミッションオリエンテッドなアプローチが展開された。ここに集まる関係者は、定型の仕事ではない、インフォーマルで集団的な活動、目標を達成するプロセスの中に、自らの課題を見出し、自発的に集まってきていることを特徴としていた。「人々が生活の新たな形態を探し求め、格闘しながらそれを生み出していき、現実的な生活世界における学習」(Engeström,2008,p.2)を求めているということが徐々にわかってきた。

のちに、活動と活動が結びつき、一つのうねりを導き出すが、その芽はこの時期に出始めていた。例えば、ユネスコスクールである富士市立岩松北小学校の校長 和田精吾氏(当時)の快諾により、動物園からの受託研究は大きく進んだ。のちに和田氏は、日本生活科・総合的学習教育学会 全国大会の実行委員長として尽力され、全国大会は、筆者の想像をはるかに超えた活動に昇華していった。まるで、人や活動のピースが複雑に絡み合いながら、パズルの絵が浮かび上がってくるようだった。そのとき、筆者は、自らの手を心地よく離れていく感覚を覚えるとともに、自らのミッションを自覚するに至った。

(6) コンソーシアム事業のコンセプト

スタートアップ期の実践から「発掘」「育成」「発信」、そして、人と人や活動と活動を「つなぐ」という四つの要素を抽出し、これらをコンセプトに、2016年、文部科学省ユネスコ活動費補助金「SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業」(梅澤収平

プロジェクトリーダー、静岡大学教授、当時）が開始された。本事業は、梅澤氏が、ESD・国際化ふじのくにコンソーシアムを立ち上げるところから始まる。

(7) ESDを推進する教員研修会のスタイル

コンソーシアム事業のコンセプトに基づき、以下のようなESDを推進する教員研修会の3つのスタイルが構築された。

- ①ESD・国際化カフェ：実践者によるESDの報告と少人数での対話を中心とした研修会で、教員だけでなく、一般の方が参加されていることが特徴である。
- ②ESD実践研修会：実践者の問題意識から出発する学びの場で、実践報告とディスカッション、大学教員による講演を基本として、学外の会場で比較的大人数の研修会で、静岡県生活科・総合的学習教育学会、あるいは日本平動物園が協力、または共催という形で実施されている。
- ③ESD実践研究会：コンソーシアム事業の実施主体の問題意識に基づいた学内で行う小規模な研究会で、学外だけでなく、学生の参加を促すことが主な内容だった。

この3年間のESDを推進する教員研修会の新たなスタイルが基になり、第2期（2019～2021年度）の対話を重視した「ともに創る学びの場」とコンテンツ制作に発展していく。

3. 考察

筆者の私的体験の総括に入る前に、エージェンシーの発揮に、前提として大きく関わっている「自由」について考えたい。トゥアン(1992)の言及する「自由」には、「行動する力」だけでなく、行動しないという選択肢も主体に委ねられており、また、「行動するための空間的余地」とは、単に物理的な空間の広がりではなく、一定のルールの中で、主体がどのようにその空間を捉えられているかという心理的な側面に依拠しているものである。

さて、主体である筆者の動物園との出会いは、感覚的に物事を捉える「直感」からスタートしている。緻密な理論からの判断ではなく、主体の経験や興味、関心、楽しさ、好みなど感情的な部分の影響が大きい。一方、知識や分業の制限より、もたらされた教員研修会の不十分な感覚は、動機づけを主体に喚起させた。それは、コンテンツ（ティーチャーズガイド・マップ折りガイドブック『No one will be left behind』）制作という外的な活動へ転換する役割を担うこととなる。

また、動物園が「空間」から「場所」へ変容していくプロセスでは、動物園についての認識や理解が不可欠であり、ここに主体の学びの中核があった。このように知の楽しみや喜びを得ることで、直感で飛び込んだ「空間」が「場所」へと変容していった。言い換えると感情的な側面から認知的な側面に重心が移動したとも言えるのではないだろうか。ただ、そこには、能力が未知数の主体に、それまでには実現しえなかった行動の可能性を引き出す場を与えた海野氏の判断があった。海野氏もまた自由に行動するだけの空間の余地があったことは言うまでもない。

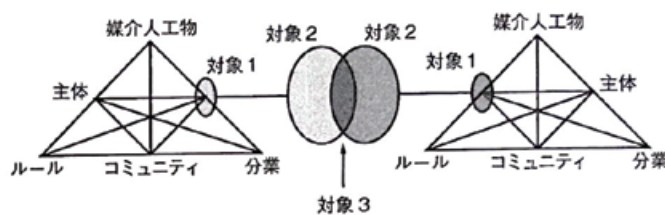
活動を推進していくためには、組織外の専門性の異なる主体の「分業」の存在が欠かせないことも本実践から示された。

そして、これまでの反省と知見を生かした「媒介人工物」としてのコンテンツ制作とESDを推進する複数の「コミュニティ」が複雑に絡み合いながら活動が展開されていく。集団的力学も複層的に機能し始めた状況を筆者は次のように省察している。

人や活動のピースが複雑に絡み合いながら、パズルの絵が浮かび上がってくるようだった。筆者は、教員研修会そのものが自らの手を心地よく離れていく感覚を覚えるとともに、自らのミッションを自覚するに至った。(前述)

【第三世代活動理論のための「最小限二つの相互作用する活動システムのモデル」】

(Engeström, 2001, p.136)



出典：山住・エンゲストローム(2008, p.20)

エンゲストロームにより示されて「最小限の二つの相互作用する活動システムのモデル」のような対象を共有した主体（筆者以外の実践者）が複数存在する状況となり、それぞれの実践者がエージェンシーを発揮するようになっていく。

また、筆者のミッションは、当初の教員研修会の開催から「媒介人工物」を創り出すことにシフトしていった。「媒介人工物」が、まさに「全国幼児教育ESDフォーラム」、デジタルプラットフォーム「ネットワークラボ」の開設、「SDGsデジタル絵本」プロジェクトといった活動であり、トゥアンの述べている「空間」の創出だった。その「媒介人工物」が、「空間」から「場所」に変容した時、主体と主体が共有する「対象」となり、新たな価値の創造が可能となるのだろう。

以上、限られた紙幅で言い尽くせたとはいえないが、実践者がエージェンシーの発揮できる「空間」をいかに創出するかがESDにおける教師教育の要諦なのではないだろうか。

〈文献〉

- イーフー・トゥアン(山本浩 訳)(1993)『空間の経験』筑摩書房
- 角替弘志ほか(2010)東海圏の地域連携を重視したエネルギー環境教育学習プログラムの開発.常葉学園大学研究紀要(教育学部),pp.276-287(田宮執筆分)
- 山住勝広、ユリア・エンゲストローム編(2008)『ネットワークング：結び合う人間活動の創造へ』新曜社
- 「全国幼児教育ESDフォーラム」報告書、コンテンツ等はすべて「ネットワークラボ」公開資料より閲覧可能である。
<https://knotworklab.com/data/>

